

小説・具志頭親方・蔡温

ぐしちやんうえーかた

さいおん

平安名
尚

青山ライフ出版

● 目次

第一章	カンダ葉（芽生え）	5
第二章	出逢い	35
第三章	真如姑樽 まにくだる	71
第四章	首里城完成	103
第五章	すったもんだの請封	137
第六章	咲くやこの花	171
第七章	評価騒動 はんが	199
第八章	支えあう仲間たち	215
第九章	御内原	255
第十章	赤木赤虫ぬ蝶 はべる なて飛びば……	
第十一章	改修・羽地大川	319

第一章 カンダ葉（芽生え）

一

一六九二年、当時那覇といえは島であつた。

東に安里川、西に国場川、南に久茂地川に囲まれた浮島と呼ばれる島であつた。アカチラ（地名）は安里川の西側の河口付近で、今の若狭町の東支那海に面した小さな珊瑚の砂場であつた。

夜明けのアカチラで裾を捌めて、魚釣りをしている三人の童子達がいた。グルクン（タカサゴ・スズキに似た魚）を狙って釣りをする童子達の二人は男の子で、名前を蒲戸（蔡温の童名で十歳）と他妻（玩塞の童名で十二歳）と云つた。二人とも清人の髪形を真似た辮髪だつた。もう一人は、三つ編みをした愛らしい女の子で思戸金（八歳）である。この特異な髪型をした三人は久米邑（久米人は一四世紀末に福建省から帰化した人々である）の童子達であつた。久米邑の大人達は、彼らの先祖が先進国で強大な大陸人であることを、童子達に教唆する風習があつての髪型だったのである。

初春はグルクンの時期である。アカチラの砂州でグルクン釣りをしている三人は投げ釣りをし

いる。絹糸の先端に重石をつけて、くるくると頭上で円を描くように振り回し、遠心力で勢いよく遠方に放り投げる手法である。後は木燕きかぶに絹糸を巻き上げながら重しの先端につけた餌に当たりを待つ。当たらないと、餌の沙蚕ごかいか子蟹かにが千切れ落ちない限り同じことを繰り返す。遠くまで投げ飛ばせない思戸金の釣り糸は蒲戸の仕事だった。今日のアカチラは満ち潮と相まって面白いほどよくグルクンが釣れたのであった。地黒の他妻たろいは元々、渡地邑わたち（国場川河口の東側辺り）の船乗りの息子で、今は久米邑に住んでいた。どこで何を釣るかを決めるのは他妻だった。蒲戸と思戸金は竹竿と餌箱を持って、他妻の指定した場所へ指定した時刻に行く。早朝でのアカチラで一刻ばかり釣りをして大漁だった三人は、夕方から漫湖まんこ（国場川と饒波川のの合流地の河口）の東岸で、明朝の餌を採る約束であった。

蒲戸と思戸金が待ち合わせの漫湖東岸の赤畑あかぎたに来たのが午後の丑刻。漫湖の一部に浅瀬があつて、弥生の干潮時に限って対岸まで歩くことができる。既に小祿おろくの加真かま（豊成亥ほうせいの童名）と、加真の仲間である松まつと鍋なべが浅瀬を渡って赤畑に来ており、そこに他妻が混じって、小石を退けて沙蚕を探している。その姿を見つけた二人は袂まくを捲り、素足で駆け出した。

二人は漫湖の泥に足を掬われながら、釣り仲間の四人に合流するや、餌の子蟹こかにや沙蚕ごかいを無言で掴んでいた。掴んだ餌は干からびないように、泥も一緒に自家製の箱にすばやく拾い入れている。思戸金も懸命に捜している、といっても立ちつくしている方が多いから、なかなか見つからない。蒲

戸は沙蚕を時々無言で思戸金に分け与えていた。

この時期、海水はまだ冷たい。しかし、凍てついて耐えられないほどの冷たさでないのが、沖縄の冬である。広い干潟で黙々と餌を採る童子達のすぐ近くに、渡り鳥の鳴なが幾十羽と、至る所で群れをなして長閑に餌を啄ばんでいる。漫湖の東西の岸渚に広がるマングローブの林と、干潟と渡り鳥と童子達。蒲戸たちのほかにも石ころをどけて、下に隠れている子蟹や沙蚕を夢中に拾う数人の童子達がいた。漫湖は如何にも南国風情の漂う場所だった。

半刻ばかり経った。

潮が満ちだしたので、蒲戸とは遠戚に当たる小緑の加真の連れは、早めに引き上げていた。他妻とも別れを告げて、蒲戸と思戸金は、餌を充分捕って満足気に漫湖を出て家路へと、日暮れの赤畑から牧志に通じる漫湖のぬかるんだ淵辺を通り、二人は河口の島崎路（今のバスターミナル裏路）に上がった時である。

蒲戸より二歳上の兄・次良じら（蔡淵の童名）と二人は鉢合わせた。吃驚したように次良が云う。

「おい！ 遅いじゃないか」

「うん」

蒲戸は素直に詫びた。そこへ次良が近づき、

「どれどれ、見せてみな」

左手に竹竿を持ち、右手は竹籠で編んだ餌箱で塞が^{ふさ}つていた蒲戸は、

「こんなもん」

と、腰籠にある魚がよく見えるように腰を振った。日焼けした黒い顔に白い歯を浮かべて満面^{まんめん}でいる。

「おお、凄^{すご}いじゃないか。これは、これは」

腰籠を覗き込んだ次良は収獲^{しゆくわく}がいいのに吃驚^{きつこう}して云う。一緒に居る思戸金に、

「思戸金も釣ったの？」

彼女に微笑^{みえう}んで聞くと、

「うん、ちょっとだけ……」

あどけない顔で誇らしげに腰を振って見せる。腰を振ると垂らした長い三つ編み髪が背中^{せなか}で泳いでいる。このところ思戸金はどこへ行くにも蒲戸について一日中遊び廻^{まわ}っていた。しかも、思戸金は隣家でこの蔡兄弟とは遠戚^{えんせき}でもあった。

「まあ、こんな日もあるさ」

蒲戸は胸を張り、泥の着いた顔のままで頭を振って、アヒラージュー（辮髪^{じゅばん}を子供がしている場合^{から}の呼び名）を振り直すと、着古した襦袢^{じゅばん}を搦^{から}めた姿で、意気揚々と先を歩き始めた。次良は弟の帰りが遅いので迎えに来て鉢合^{はちあ}わせたのだが、すぐに会話が途切れていた。いつものことである。

蒲戸は次良に、

（釣りばかりしている）

と云われるのが嫌いで黙々と先を歩いてた。次良も、

（釣りばかりしていて、勉強しろよ……）

喉まで出掛かっている言葉を呑み込んで後を追っていた。三人は暗くなりかけた島崎路を黙って歩いている。足早に先を歩いてた蒲戸は、近くの泉崎橋を渡るのを避けて見栄橋に向かう。泉崎橋界隈は暗くなると不良が多い。そこは商都らしく薩摩人や唐人が日暮れの街を往き通っていた。

古往今来いずこでも同じ現象だが、人々が多く集まる場所には不良と呼ばれる喧嘩好きの猛者も集ってくる。そこで喧嘩をふっかけられたら、気っ風のいい蒲戸は売られた喧嘩を買ってしまふ。つい先日の喧嘩で負ったおでこの傷もまだ鬱血^{うけつ}している。そのとき、籠の魚をぼったくられた悔しさが残る蒲戸は、泉崎橋を避け、遠廻りになる見栄橋へと、意識して細く暗い農道を選んで歩いて行くのだった。

周りは真和志の塩田が拡がり灯りがない。夕暮れの久茂地川沿いの農道を歩く三人に、夜風が頬に突き刺さってくる。蒲戸に放れないようにについて歩く思戸金、その後を黙々と次良がついている。三人はひたすら無言のまま歩き続けていた。

三人が木造りの見栄橋を渡るともう、浮島である。浮島には那覇四邑が東西に分かれて賑わって

いる。その真ん中の幾分、丘陵となったところが久米邑だった。百戸ぐらいで、四百人位が居住していた。三人が渡る見栄橋の前方には首里と那覇を結ぶ長虹堤ちようこうていが見えている。見栄橋を渡ると道幅が広くなつて久米邑大道うふみちである。道幅が広くなると、次良は後から駆け寄り腰籠の収獲を再び覗いて云う。

「あれあれ、グルクンもあるね」

「うん、グルクンだらけ……」

「そうか、岩場だけじゃなく、砂場でも釣りをしたんだ。母さんに、グルクンの油揚げをご馳走に戴こうかな」

蒲戸は、兄が面長の顔を更に長くして覗いているのを知りながら、振り向かず威張った口調で歩きながら次良に告げるのだった。

「グルクンはね、母さんが釣ったんじゃないよ。釣ったのは俺。料理してくれるのが母さんなんだからね」

「それはそうだろう。釣ったのは蒲戸。料理してくれるのが母さん。俺、グルクンの油揚げが大好きなんだ」

次良はすまして云う。

「そんなら、少しぐらい感謝しろよ、俺にね」